

ソウハチ水深700mにも分布か! ?

金丸 信一

(日本海区水産研究所)

日本海のソウハチの分布域については、陸棚上の水深250m以浅とする報告が多く(表1)、渡辺ほか(1958)の底層水塊区分に従えば対流圏暖水塊から対流圏冷水塊域にかけて分布している。ところが此の度日水研が実施した平成6年度東海黄海等生物資源調査におけるトロール調査で、これまでに知られなかった深部の非対流圏冷水塊域からも漁獲された可能性が高いのでその概要を紹介する。

場 所：島根県日御碕北西沖(図1, 表1 中段)

日 時：1994年9月11~12日, 07時~16時

漁 法：オッター・トロール30分曳

調査船：但州丸(444トン, 1500馬力, 兵庫県立香住
高校漁業実習船)

調査は海底水深150mと200mから700mまでを深度100m刻みで7回行った。このうち問題のソウハチが漁獲されたのは、水深151mの調査点で6尾, 412~407mで2尾, 516~509mで5尾, 621~625mで12尾, そして708~700mの7尾である。因に、他の調査場所として、山形県酒田沖の水深105~626m, 兵庫県網野沖の201~708m, 鳥取沖の98~719mの

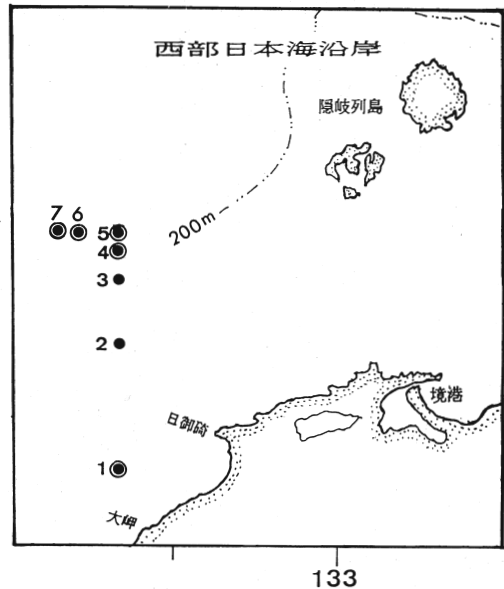


図1 調査点 (二重丸はソウハチ漁獲地点)

表1 日本海におけるソウハチの分布域

出典	場 所	水 深	水 温	備 考
日水研：平成元年度漁業資源評価システム高度化調査報告	日本海中・西部沿岸	150~200	2.4~16.1	調査水深100~400m
：平成2年度	同 上	130~240	1.1~14.8	〃 94~549
：平成3年度	同 上	141~200	1.8~13.5	〃 109~548
日水研：平成6年度 東海・黄海等生物資源調査	島根県日御碕沖	151~708	0.2~10.4	〃 105~708m
渡辺 (1958) 日水研報(4)	日本海西南部沿岸	120~220		標本採集時の操業範囲
南部ほか(1991) 富山市科学文化センター研報(14)	富山湾新湊沖	150~400		
北水研 (1967) 北海道沿岸漁業資源調査報告書	北海道西岸	15~250		
富永 (1991) 漁業生物図鑑「北のさかなたち」	北海道岩内沖	100~200		
津田 (1990) 原色日本海魚類図鑑	日本海	50~200		
落合 (1988) 新日本動物図鑑(下)	日本海	50~200	7.6~15.0	

深度範囲を同様に実施したがソウハチの漁獲はみられなかった。ただ、石川県能登半島禄剛埼北沖の水深493~504m地点で1尾(SL 129mm, 雌)漁獲されている。

島根県沖での過去の調査も加えた漁獲物の体長組成は図2のとおりで、今回は点模様入りヒストグラムで区分した。水深240m以浅の漁獲物は標準体長10~20cm主体で今回も9~22cmの範囲の雌雄混在であるのに対し、400m以深の漁獲物は22~37cmの大型で雌だけという特徴的なものであった。

GSIは1.7~11.6, 全て空胃状態である。

さて、問題はこれらが果して海底付近で獲られたのか、或いは表・中層にあって揚網過程で入網したものなのか、ということである。残念ながらそれを証明できる根拠は持ちあわせていない。図2の各調査点の水温鉛直分布を示したのが図3である。表面~20mが26~27℃で水温躍層が150m付近で2~10℃を示し、350m以深は1℃以下塩分34.10前後である。

これまでの調査経験に基づく本種の漁獲時の水温からは中層の150~200m位が該当することになる。ソウハチが夜間に浮上し流網類に羅網することはよく知られるところで、また北海道西岸の底びき網漁場で、日中に獲れていたソウハチが日没頃を境にホッケと魚種交替する現象も筆者は経験している。

しかしながら、①今回の操業は日中に限られていること、②表・中層からの入網にしては比較的漁獲尾数が纏まりすぎるきらいがある。もしそうだとすれば中層でのトロールネットの漁獲効率からすれば相当数の分布量であろうし他の調査点で獲られてもよいのではないか、③最近、兵庫県の底びき

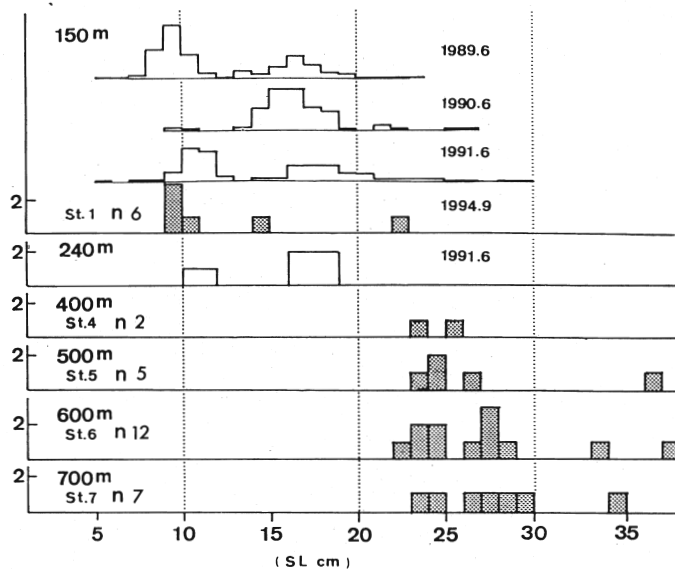


図2 島根県日御崎沖のソウハチの体長組成

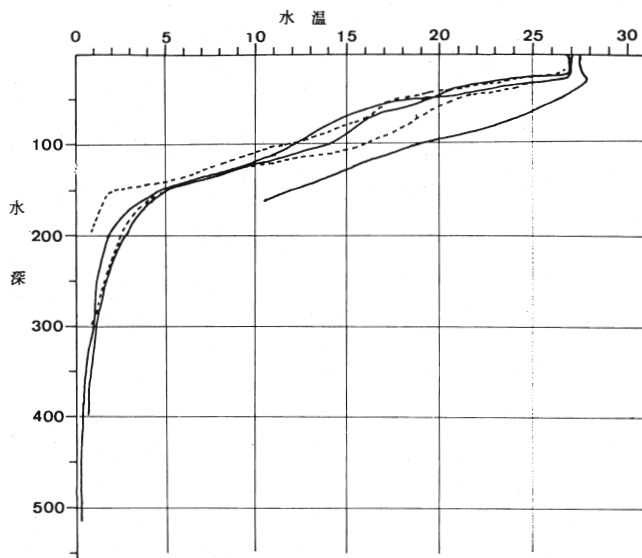


図3 島根県日御崎沖の水温鉛直分布

船が大型ソウハチ狙いで深部の操業も行っている。これは小型ソウハチの方が経済効果は高いが漁況悪化による(聞きとり情報)等の状況証拠から考えて、今回のソウハチは底層に分布していたものと判断した。ということは、浅海から深海まで、そして日本海固有冷水域にも分布する極めて環境適応の広い種ということになる。